

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

広島県の西部先生より西地区の雪山研修会の報告をいただきました。雪不足が心配されましたが、ともあれ無事に終了したとのことです。写真とともにお読みください。

第5回西地区登山部顧問雪山研修会報告① 西部伸也先生より

第5回西地区登山部顧問雪山研修会は予定通り1月9日(土)～10日(日)に広島県・深入山(しんにゅうざん)ほかで実施されました。無事に、そしてともあれ成功裏に終わりました。敢えてこのように書きますのも、今年は全国的な暖冬・積雪不足で果たして「雪山」になるのかどうか心配されたからです。実際、今年の積雪は大変少なく、ここ西中国山地の山々では数cm～10cmしかありませんでした。西中国山地でも1月のこの時期にこれだけ雪が少ないのは、30年少々の私の登山部顧問経験の中でも過去に1・2度あったかどうか(20年前くらい?)というところですよ。例年ですとこの時期には1m前後の積雪があるのですが…。

さて、そのように少ない雪でしたから、このたびは登山はともかく、スキーやスノーボードは無理かもしれないと半ば覚悟をしていましたが、それでも西地区各県の皆さんが集い、お互いに交歓することこそがまず意義ありということで、研修会の中止または延期は一切考えませんでした。そして、1月9日12時30分に、宿泊予定の深入山山麓「いこいの村ひろしま」にまずは15名が集結しました。県名と名前を敬称略で紹介します。鳥取：富永、島根：藤原、岡山：田中・横井、広島：尾道・谷・寺田・西部・美藤・百出、香川：金崎・玉垣、西村・三宅、宮崎：下村。このうち、尾道・谷・寺田の3人の先生は高体連のOBで、ご年齢は尾道・寺田両先生が71歳、そして谷先生は過去5回の研修会参加者の最高齢となる81歳です。そしてこの日の夕方には、島根県OBの岡崎先生(65歳)も合流しました。なお、百出くんは、広島県高陽高校登山部の2006年度(私の高陽高校最後の年)の卒業生で、今は鳥取市に在住なのですが、昨夏、私の高陽高校勤務時代の登山部員・顧問の同窓会があった折、百出くん自身は出席はできなかったものの、同窓会に合わせて作成した近況報告集で私がこの雪山研修会のことを紹介していたところ、バックカントリーに興味を持ちそれを体験したいと思っていた百出くんがスノーボード持参で参加するに至ったという次第です。

以下、研修会の概略報告です。なお、天候は両日とも曇り、気温はほぼ平年並みというところでした。

研修会1日目の深入山。いこいの村のすぐ脇が東登山口となるが、標高800mのこのあたりでも積雪はわずかに数cm。いつもであれば雪で覆われて純白になる深入山も、至る所枯れ草が覗き、薄茶色の山となっている。したがって誰もスキーやスノーボードは担がないし、スノーシューやワカンも車に置いていく。唯一の特別



登ってきた東尾根を振り返る

な道具は、香川・三宅先生が持参する尻あての簡易ソリのみだ。13時05分に東登山口を出発。3人のOBの先生も、現役組に遅れはするものの元気に登頂。1時間弱で全員が標高1153mの山頂に立つ。山頂直下の斜面で三宅先生たちが持参の尻あてソリ滑りに興じるが、「会心の滑降」とはやはりならない。下りは登ってきた東尾根とは別ルートとなる「西尾根」（実際は南向き）を下り、途中の東屋で小休止ののち、山頂を出発して50分ほどで南登山口（標高は東登山口と同じ）に降り立つ。あとは車道を15分ばかり歩いていこいの村に帰着（15時過ぎ）。雪があれば、特にスキー・スノゴ班は、2本の登山・滑降も考えていたのだが、当然それは誰も考えず、18時からの夕食まで入浴・その他でゆっくりくつろぐ。

なお、西部はこの間、翌日の行動（当初予定は深入山北隣の臥竜山1223m）を再検討すべく、臥竜山麓の八幡高原（標高はやはり800mほど）や、さらにはもう少し北の、麓にスキー場のある大佐山（1069m）を偵察。八幡高原は深入山よりは雪は多いものの、それでも10cm程度だ。スキー場のゲレンデが山頂近くまで続く大佐山も同じような状況と思われた。ただ、ゲレンデであれば、下は草地で大きな石もないから、20cmの雪があれば滑降は十分楽しめる。スキー場の駐車場は有料であるが（1台1,000円）、その100mほど手前の林道に入ってすぐの所に10台以上がゆうに止められる空き地も見つけた。晩の降雪に期待しつつ、翌日の行動を大佐山に変更することを決心。

夕食後、19時から研修室を借り切って懇親会。各参加者から寄せられた様々なお酒に舌鼓をうちつつ、楽しく和やかに歓談。私のほうからは、昨年末にまとめたA4版120ページほどの『中国山地のバックカントリースキーと高校登山部顧問の30年』を紹介させてもらった。（自費出版での製本も検討中であるが、何分相当の費用がかかりそうなので、どうするかは思案中。なお、内容の3分の2程度は、広島県高体連登山専門部のホームページに掲載してもらっている。）また、ご自身の登山記録がノート45冊分にも及ぶという寺田先生からは、中国新聞文化欄コラムの「緑地帯」に8回にわたって連載されたご自身の文章の紹介もあった。さらに、多彩な趣味人の岡崎先生からは、ご自身の手になる手打ちそばとアゴ（トビウオ）の燻製が皆さんに振舞われた。



雪があれば真っ白になるはずの深入山頂上



山頂直下での尻あてそり滑りに興じる



深入山山頂で小休止（背景は臥竜山）